

令和2年度宇部市総合教育会議（第1回） 議事録

- 1 日 時 令和2年10月5日（木）18：00～19：30
- 2 場 所 オンライン会議 傍聴席 宇部市役所 4階 第2・3・4委員会室
- 3 出席委員の氏名

久保田 后子 市長
野口 政 吾 教育長
田村 賢二郎 委員
山野 あい子 委員
川崎 裕 美 委員
重村 美 帆 委員

4 事務局出席職員

熊毛上宇部中学校学校運営協議会委員、藤井上宇部中学校校長、西村吉部小学校校長、小川スクールソーシャルワーカー（以上オブザーバー）
上村教育部長、床本参事、小林総務課長、
藤井施設課長、松岡学校教育課長、長谷川学校教育課長同格、藤田教育支援課長、永久教育支援課長同格、松本コミュニティスクール推進課長、伊藤総務課副課長、河村総務係長

5 趣 旨

（事務局）上村教育部長

ただ今から、令和2年度宇部市総合教育会議（第1回）を開催いたします。

本日の議題は、「コロナ禍における学校教育について」として、ICTを活用した教育の推進、コミュニティ・スクールの取組、心に不安や悩みを抱える児童生徒への対応となっております。

本日の会議の終了時刻は、19時30分を予定しています。

それでは、ここからの進行は、本会議の主宰者であります久保田市長にお願いします。

（委員）久保田市長

皆さんこんばんは。猛暑から、そして台風から、もちろんコロナと、色々なことで皆さんそれぞれご心痛かと思いますが、本日は、令和2年度第1回宇部市総合教育会議をオンラインで開催ということになりますが、どうぞよろしく願いいたします。それでは、只今説明がありましたように、本日18時から19時30分までという貴重なお時間をいただきまして、「コロナ禍における学校教育について」三つのテーマで、進めさせていただきます。進行としては、まず1点目のICTを活用した教育の推進について、事務局の説明、そして皆様からの意見をお伺いし、そして総括ということで、進めていきたいと考えております。事務局説明として、上宇部中学校運営協議会の熊毛様、そして上宇部中学校長の藤井様、吉部小学校長の西村様、そしてスクールソーシャルワーカーの小川様がオブザーバーで参加していただいております。ありがとうございます。それでは早速ですが、

1点目の議題について事務局からの説明をお願いいたします。

(事務局) 松岡学校教育課長

それでは、「ICTを活用した教育の推進」について説明します。今年度7月に中央教育審議会は、withコロナの段階とpostコロナの段階が示されましたが、現在もコロナが収束していない段階ですが、この状況においてもICTを活用して、新しい教育様式を実践するとされています。今後、新型コロナウイルス感染症が収束した後もpostコロナの段階ということで、ICT教育を推進していくことになっています。本市においては、以前からICT教育環境の整備に取り組んできましたが、教員のICT機器等を活用した取組は限定的でした。しかし、このコロナ禍においては、小中学校が臨時休校した際に動画配信サービスを活用した授業動画の配信を行ったり、北部地域の学校では、双方向でのオンライン授業を実施しました。さらに、6月に授業が再開した後も学級閉鎖等がありましたが、その際もオンライン授業を実施しました。また、各クラスをつないだオンラインでの生徒総会や、連携する中学校と小学校をオンラインでつなぎ中学校の学校紹介などを行いました。今後については、1人1台端末の環境が年度末までには整います。postコロナの状況を見通して、ICT教育のモデル校である琴芝小学校や北部地域の小学校を中心に、可能なことから実施していき、他の小中学校にも情報提供していきたいと考えています。今後ICT教育推進協議会を立ち上げて、postコロナの時代に向けた教育を推進していきます。実際に吉部小学校でどのような取組みがされたのかをご紹介します。

(事務局) 西村吉部小学校長

吉部小学校の西村です。今日はICTを活用した教育の推進について、オンライン授業への取組、プログラミング教育への取組、そして授業での活用場面の三つの内容について、お話をさせていただきます。本校では、臨時休業中の学習保障、そしてみんなの繋がりづくりとしてオンライン授業に取り組みました。ICTに堪能な者がいない本校でしたが、教育委員会からの支援を受けながら、全くの手探りで高学年の授業を開始することにしました。高学年の実践で、ある程度の見通しが持てたので、5月の登校日の際に、低中学年にも、WEB会議用アプリの使用方法について指導を行い、連休明けから全校での授業を開始しました。この取組により、保護者を巻き込み、全校一丸となって進む雰囲気できたのは、大きな収穫だったと思います。途中から配信会場を理科室に移しました。この頃には、子どもの様子を確認する電子黒板と教材提示用の電子黒板の二枚を使用するようになりました。学校が再開して、児童の保護者にアンケートを実施しました。その一部を紹介します。「先生やお友達と一緒に何かできることが、とてもうれしかったようです。」「本を読んでいたり、なぞなぞをしたり、家でできることが少なく、他の人と繋がっていることで、いつもと違う毎日を過ごせたので、とても感謝しております。」「今回の遠隔授業で、学校教育の新たな可能性を感じました。」「今後、第二波、第三波がこないとも限りません。我が家では、1台のスマートフォンを兄弟で交互に使っていましたが、もう1台のタブレットを準備しております。」といった意見をいただきました。本校では、学校運営協議会を中心として、教育委員会、外部機関からの支援を受けながら、4年前からプログラ

ミング教育を進めています。昨年度は、保護者でもある小野田工業高校の教員を講師に、教育委員会で管理しているエムボットの活用を中心にして、数回のプログラミング教室を実施しました。コロナの関係で、今年度は、先日、ようやく1回目を実施することができました。教員の指導力の育成も含め、これからも学校運営協議会や教育委員会、外部機関との連携の中で、プログラミング教育を進めていきたいと考えています。調べる、まとめる、記録する、遠隔地から参加する、考えを交流する、タブレットを活用することで、学習の様子も大きく変わってきました。万倉小学校6年生が本校の外国語の授業に、遠隔で参加しています。外国語の時間は両校を結んで授業を行っています。オンライン授業を行うことで、教員の意識も、授業の様子も大きく変わりました。少し早いかもしれませんが、タブレットがノートや鉛筆と同じ文具の一つになりつつあるといえるかもしれません。

(委員) 久保田市長

ありがとうございます。それでは、御意見のある方はいらっしゃいますか。

(委員) 野口教育長

西村吉部小学校長、本当にありがとうございます。私たちが実は一番心配していることが、ハード面は次々と導入されて、令和3年度には確実にタブレットが1人1台になります。ところが、教員の指導力について、心配なところがありますが、西村校長はICTに詳しくない教員がほとんどであったと言われましたが、これは、知識がなくても実践を重ねることにより、ICTを活用した指導技術が身に付いていくのかという点について、どのように思われたのかお伺いします。

(事務局) 西村吉部小学校長

先ほど説明の中でお話をしましたが、本校の場合はICT担当がいない状況です。パソコンをワープロ代わりに使う程度のレベルだと思いますが、実際には、勇気を持ってといますか、第一歩を踏み出せば、そのあとは実践していく中で、教員たちの指導力が高まっていったと考えています。その第一歩が難しいところですが、そこを踏み出せば、使っていくうちに、スキルが上がってくるのではないかと思います。

(委員) 久保田市長

ありがとうございます。実践していくことが大事であるということですね。

(委員) 山野委員。

今回、新型コロナウイルス感染症対策で、宇部市の対応がとても早かったということが、ありがたいことだと思いました。すぐにタブレットを活用して、子どもたちが、自宅でも学習できるようにということで、取り組んでこられたことが素晴らしいと思いました。どの子どもにも提供できるようにと、試行錯誤されてきた教育委員会事務局の取組も素晴らしいと思いました。吉部小学校の報告を見せていただきましたが、吉部小学校は、学び合いをずっと見せていただいていた学校なのですが、今回、ICTを活用して、模範となる取組をしてこられたことが素晴らしいと思いました。私はeラーニングによる免許取得ということで、多くの講座を聞く機会がありました。その中で、情報教育についての学習があったのですが、アクティブラーニングに活用可能なICTというものがあ

て、その事例の中で反転授業というものがありました。その反転授業というのは、アメリカの中学校、高校で実施しているということなのですが、講義はeラーニングで、自宅で見ることが宿題。そして、学校にきて教室では演習や話し合いをするという、普通だと学校で講義をして、自宅で宿題をすることと、まるで逆になっているという使い方があるという話を聞きました。宇部市では、コロナ禍で先生方が授業動画をすぐに作成されたのですが、こうした取り組みを活用すれば、15分程度の授業動画を自宅で見ることが宿題で、そのあとで、学び合いが学校でできるような形がもし取れたら、素晴らしいと思いました。パソコンを持ち帰ることが可能かということと、それから、Wi-Fi環境が整っているかという点で、現状では難しいかもしれませんが、将来的に実施できると良いと思っていたのですが、先ほどの吉部小学校の取組を聞きまして、吉部小学校では反転授業が可能になるかもしれないと考えました。ちょっとした提案なのですが、もし使えそうであれば、実施していただけるとありがたいと思いました。

(委員) 久保田市長

今の御意見について何かございますか。

(委員) 野口教育長

パソコンを自宅に持ち帰ることについて、来年度から1人1台となった場合に、例えば宿題や学校での学習の復習等を行っていく環境づくりをしていきたいと思っています。ただ、すべての家庭にWi-Fi環境が整備されているか調査したところ、約2割程度の家庭でWi-Fi環境がないということでした。こうした実態も踏まえながら、家庭環境と同時に、地域において、市長さんがすすめておられるスマートシティということで、ふれあいセンター等でWi-Fi環境の整備が進められていますので、どこに居ても、オンラインで学習の提供を受けることができるというような環境を作っていきたいと考えています。

(委員) 久保田市長

ありがとうございます。まとめていただいたと思いますが、おっしゃっていただいたようにスマートシティ宇部を目指して、地方都市だからこそ高速通信網を活用した環境づくりというのは、大都市に負けない教育の質を上げていくことができる非常に重要なものだと考えています。

(委員) 重村委員

吉部小学校の校長先生にお伺いしたいことがあるのですが、実践について大変興味深く、拝見させていただきました。小学校の子どもたちでも、これだけオンラインそれからリモートでの授業を受講されて、学習を進められているということは、本当に素晴らしいと思っていますのですが、実は大学でも同じように、コロナ禍の中で、オンデマンド授業、それから、WEB会議アプリを用いた授業を展開してみたのですが、実際のところ少し学習の定着というところで、学生たちが本当に理解できているのかということが、非常に不安に思っています。実際に4月、5月にこういった形でICTを活用された授業を実践されて、現在対面授業に入られていると思うのですが、家庭で受講された動画での授業の学習の定着について、手応え等はどのような形で確認をされているのかお話を伺いしたいと思います。

（事務局）西村吉部小学校長

御承知かとは思いますが、本校は大変小規模の学校です。クラスごとに授業を行うと2人から8人ぐらいになるのですが、オンラインでも通常と変わらない授業をしています。ですから、学校を再開してから、テスト等も行いましたが、全く問題なかったと思っています。やりとりに関しても、2対1や8対1、子どもたちも意見交換をするのですが、意見交換は、やや難しいときがありましたが、オンライン授業を実践したことについて特に問題は感じませんでした。ただ、理科の実験等、実技系のことは実施していませんので、そういうものはちょっと難しいのではないかと思います。

（委員）田村委員

小規模校だから実施できるという部分もあると思いますが、これを大規模校でも実施していかなければならないというところで色々な問題がでてくると思います。現在でも、学校によって、大規模校でも格差があるようですが、先生方の能力によって、できることの差が出てくると思うので、先ほどのお話にありましたが、すべての先生がコンテンツを使用できるための研修会をしっかりと実施して、レベルアップしていく必要があると思います。また、学び合いについて、机を向かい合わせにして、額を突き合わせて話をすることは難しいと思いますが、このような状況で活用できるアプリがあると聞いていますので、導入していただければと思います。それと、ネットリテラシーという点について、少し心配に感じています。自宅に持ち帰って、保護者の目の届かないところで使うことになると思います。小学校では、スマートフォン等は、親の目の届くところで使うという決まりにしていたのですが、学習に使うということになると、自分の部屋に持っていくことになりまので、そこで少し危ないことも出てくる可能性もあります。パソコンがウイルスに感染することもあるようですし、授業中でも、関係のないサイトを閲覧して全員がフリーズしてしまったという話も聞いたことがありますので、そうした点の指導もしていかなければならないと思います。以前に教育委員会とPTAで作成したスマホやゲームの約束というものがありましたが、改めて、コロナ禍の今の時代に対応できるような新たなものに作り替えて、家庭も一緒に考えていけるような対策、ネットリテラシーの構築をしていかなければいけないと思っています。

（委員）川崎委員

今回、小規模校でオンライン授業が実施されたと思いますが、厚南小学校では人数が多いので、双方向のオンライン授業ができるのだろうかということや、電子黒板が充実していないので、どのようにして使うかということが課題のようでした。それから子どもたちのハード面では充実していると思いますが、先生方もそれに対応できるような学校自体の設備も充実して欲しいと思います。高校では、入学式の直後から、オンライン授業が始まりました。双方向ということはあまりありませんでしたが、人と繋がっているとか、学校の先生と繋がっているというところで、親として安心できる部分がありました。ですから、今回のような、これほど長い休校になるということは、これから先ないのかもしれないかもしれませんが、友人と繋がっていることや学校の先生と繋がっているという状況が、安心を生むのではないかと思います。

(委員) 久保田市長

ありがとうございます。

それではこのテーマについて、まとめさせていただきたいと思いますが、よろしいですか。まず、ハードとして、ICTを活用した教育の推進していくなかで、電子黒板が不足しているというお話がありました。ようやくスタートした国を挙げてのICT教育が本格化するということでございますので、宇部市は少し早くスタートしておりましたが、まだまだ、全体的に十分ではございませんので、ハード面の機器類の整備を進めていきます。また、先生方のICTを活用した指導力の向上のための研修等も大切であるという御意見でした。ネットリテラシーについて、道具として身近なものになっていく中で、スマホやゲームの約束の見直しも必要ということでした。たくさんの御意見をいただき、ありがとうございました。

それでは、次の議題の「コミュニティ・スクールの取組」について、事務局の方から説明をお願いします。

(事務局) 松本コミュニティスクール推進課長

それでは、コロナ禍におけるコミュニティ・スクールの取組ということで、3密を防ぐために、ICTを活用した新たな取組として、上宇部中学校の取り組みを示させていただいています。これまでと同様の交流活動が難しい中、今だからこそできる交流ということで、地域や学校で、新たな取組を考えて実施していくことについて、上宇部中学校、厚東小学校、琴芝地区、厚東地区の取り組みを示させていただいています。今後、大規模な活動は難しくなっていくと思われます。必要な活動をどう実施したらいいかということで、やり方を工夫して、小規模な活動を地域の中で学校等を通して、活動を積み重ねていくということも大切な取り組みだということに視点をあてて、藤山小学校、見初小学校、東岐波小学校の取組を、示させていただいています。そして、実際にコミュニティ・スクールの活動をされている上宇部中学校の方に具体的な事例を紹介させていただきますので、よろしくお願いたします。

(事務局) 藤井上宇部中学校長

上宇部中学校校長の藤井でございます。

本日は、withコロナ時代に求められる役割と題しまして、上宇部中学校の実践を、学校運営協議会の熊毛さんにもお越しいただいています。ともにお話をさせていただきたいと思ひます。コミュニティ・スクールは学校運営の充実を目指して、学校、家庭、地域で目標やビジョンを共有し、それぞれの立場でできることを提案しあい、協同活動につなげていく仕組みです。上宇部中学校では、これまでも、地域の未来を担う生徒に関わってきたいという地域の皆様の思い、昔のような荒れた学校にはしたくないというPTAや、卒業生の皆様の思い、それから生徒に自信と誇りを持たせたいという学校の思いから、地域や保護者との関わりの中で、生徒に自己有用感を持たせたいという目標を共有した上で、どんな取組をしたら、生徒に自己有用感を持たせることができるかということ協同して、様々な学校支援の取組や、生徒による地域貢献の取組など、地域と学校による共同活動を行ってきました。このような中、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、目

に見える形での地域の皆様と生徒たちの活動が困難な状況にあります。そこで、私たちは今できることは、今だからできることが何かということを考えました結果、今一度原点に立ち返り、目標やビジョンの共有を確固たるものにすることが大切であるという結論に至りました。そこで、昨年度から進めています小中一貫教育の取組の中で作り上げましたグランドデザインを活用しまして、今一度、学校、家庭、地域で、目標やビジョンを共有するとともに、生徒たちとも共有していく取組を始めました。このグランドデザインには、発達段階に応じて、目指す将来の姿に向かう子どもたちの姿が具体的に示してあります。これを、学校評価アンケートと連動させ、分析協議し、改善していくこととしました。次にお示しするのが、グランドデザインと連動した学校評価とその結果を分析したグラフでございます。この分析の結果とグランドデザインを生徒たちに示しまして、改善に向けて今生徒たちができることを考えました。その結果を学校運営協議会で提案させていただいて、地域の皆様と協議をいたしました。その時の様子を動画にまとめてありますので、ご覧いただけたらと思います。

(動画を視聴)

それでは、この協議に参加いただいております学校運営協議会の熊毛さんに、その時の協議の様子とご感想をお話いただきたいと思います。

(事務局) 熊毛上宇部中学校学校運営協議会委員

この協議は、地域をさらに良くしたいという強い思いを持って生徒たちが各テーマを決めて、司会進行、まとめの発表まで実施しました。協議内容は、本当に具体的で、これなら地域がさらに良くなると思える内容でした。課題を見つけて、考え、そして提案し、協議をしてその対策を練るという習慣がもうすでにでき上がっていると感じられて、地域のものとして、とても楽しいと感じました。

(事務局) 藤井上宇部中学校長

ありがとうございました。こうした地域の皆様の支えで子どもたちが成長しています。今後につきましては、皆様からいただきましたアドバイスを元に生徒たちが今できることを考えて、地域の皆様のお力を借りながら、実践をしていくこととしています。さらに、このグランドデザインでは、目指す将来の姿とSDGs目標が紐付けてあります。こういった大きな目標とこの姿を関連させることで、将来的には、設置者の異なる高校や大学といったところとも目標ビジョンを共有して、連携していくことを視野に入れてつなげていきたいと考えています。

(委員) 久保田市長

どうもありがとうございます。

上宇部中学校藤井校長そして、学校運営協議会の熊毛さんありがとうございます。具体的な実践事例で、大変わかりやすかったと思います。宇部市では、地域と学校の繋がりには長い歴史を持っておりますが、リモートの活用という新しい局面ですので、色々な実践がご紹介されましたが、委員の皆様のお質問や御意見をいただきたいと思います。

(委員) 田村委員

私も川上の学校運営協議会に所属してまして、コロナ禍においてあまり活動が以前ほ

ど活発ではなくなっているというのが正直なところですが、それでもグランドデザインについては、昨年度までに立派なものができ上がっていましたが、上宇部中学校のグランドデザインは、非常に見やすく、わかりやすく、改めて参考にさせていただきたいと強く思った次第です。今後も大人数で集まることは、少し憚られる状態がまだまだ続くと思います。そういうときにどのように活動していくのかというところで、逆に集まらなくても済む形で対応できるということを逆手にとりまして、今まで限られた人たちで、コミュニティ・スクールの活動をしていましたが、逆にこのシステムを使いますと、それこそICTを活用して、より多くの地域住民を巻き込んだコミュニティ・スクールを構築していく可能性を模索していくことも良いと思いました。

(委員) 山野委員

藤井校長が言われたように、子どもたちが自分たちはできるという自信を持つためには、地域の方々に親しみを感じる体験をして、地域の方々に褒められるということがとても大切で有効だと考えます。前任の校長が、地域貢献は半端ないということをよく言われていたのですが、地域の様々な事に参画するということは、子どもたちの大きな力に繋がるということが、上宇部中学校の取組から、よくわかると思います。今回、私は上宇部小学校の学校運営協議会の会長になって、夢たまごネットの副会長という立場をいただいたのですが、小学生にとって、中学生は憧れのお兄さんやお姉さんであり、とても心強い素晴らしい上宇部中学校と一緒に小学校も参加だけではなく、参画させてもらえるということになったのですが、本当にありがたいことだと思います。挨拶や自主学習、掃除等、中学校の子どもたちや小学校の子どもたちが考えたことを可能にするために支援をするのが、夢たまごネットという会であるということが今回の話し合いでとてもよくわかりました。藤井校長が今年、コロナ禍でできないからこそできること、何ができるかということ、小中一緒に考える機会にしましょうとおっしゃったのですが、子どもたちが考えたことを地域の大人が実現の手伝いをするということが、上宇部校区では着々と進んでいるということ、先ほど熊毛さんがおっしゃってくださったのですが、夢たまごネットに参加させてもらい、それをとても感じました。本当に素晴らしい取組がなされていると思います。

(委員) 川崎委員

私も厚南小学校の学校運営協議会で地域コーディネーターをさせていただいております。今までは、行事等で子どもたちと関わることも多かったのですが、地域の行事がなくなって、子どもたちが地域に関わるということも、少なくなってきているのが現状です。しかし、少しずつですが、今だからできることを考えながら、今まであったことを、当たり前ものとしてするのはではなく、何が大切で、どんなことを目標としてやってきたのかということをもう一度見直す機会になっています。もう一度、皆さん言われているように、原点に立ち返って見直して、ゆっくりと考え直す機会になっていると実感しています。地域との関わりが止まることなく、地域の方に支えられながら子どもたちが生活しているということを実感できる年になって欲しいと思っています。

(委員) 重村委員

大変興味深く聞かせていただきました。それで、素朴な疑問なのですが、上宇部中学校の生徒さんたちが、今、目の前にある自分たちができることと言って、その協議会の中で挙げられたテーマについて、具体的にどのようなものがあつたのか、少し紹介していただけますか。

（事務局）熊毛上宇部中学校学校運営協議会委員

今だからこそできるということで、生徒さんが言われたことは、挨拶運動があります。挨拶運動を外でするので、密にならないような配慮等の課題はあるかもしれませんが、中学生の皆さんが、小学生と一緒に朝の挨拶運動ができるのではないかとという提案がありましたので、私たち地域のもので、驚きとうれしさ一杯でお話させていただきました。これは結構具体的に、先生方も一緒に交じってもらって、実現可能ではないかと思っています。

（事務局）藤井上宇部中学校長

その他にも、子どもたちが自ら学ぶということに対しての課題を子どもたちのアンケートの中から見つけ出しまして、家庭学習の自学ノートをどのようにして充実させていくかということを考えています。また、小学生にも模範になるものを示しつつ、小学生からも、自分たちなりの交流をして、上宇部校区、琴芝校区と一緒に盛り上げていくことや、地域貢献の実働は今までしてきているのですが、子どもたち自身として、全体で6割程度しか地域のために何かをしたいと思っている子どもたちがいないということが課題であると感じています。そのあたりをどうすれば改善できるのかということを経験の皆様にご相談するといったことがありました。

（委員）野口教育長

ここに参加しておられる方は、皆さん、上宇部中学校の実践、素晴らしい取組というのは、御存知だと思いますし、山口県でもコミュニティ・スクールの三本の指に入る学校の一つが上宇部中学校です。藤井校長、熊毛さんに、心から敬意を表したいと思います。今年は、色々な祭りやイベントが中止になりました。これまでは上宇部中学校の子どもが参画して、様々な出し物やイベントを、手伝いではなく、主催してやっていました。それが非常に印象的でした。コロナ禍で多様な取組をされているということですが、私は今からの地域連携の中で、地域の核となるふれあいセンターと学校がどのように連携、協力していけるかということが、コミュニティ・スクールの次のステージに進むうえで、大変大切になってくると思います。コロナ禍だからできないこともあるかもしれませんが、アフターコロナになれば、必ずまたそういう取組も行われてくると思いますので、藤井校長や熊毛さんから、地域の核となるふれあいセンターと学校との関わりを今からどのように進めていきたいかということについて、御意見をお伺いさせていただきますでしょうか。

（事務局）藤井上宇部中学校長

ふれあいセンターのお話が出ましたけども、上宇部ふれあいセンターに関しましては、以前から、かなり整備をされているというのが印象でございます。地域学校協働本部という国が求める仕組みがあるのですが、名前はそれではないのですが、上宇部校区におきましては、ふれあいセンターがそうした機能を自然に果たしていらっしゃると感じていま

す。例えば、子どもたちに書道を専門的に教えることは難しいということが国語の教員の間で話が出まして、それをふれあいセンターに相談に行ったところ、ふれあいセンターで教えていらっしゃる方をご紹介いただいて、学校で指導していただけるという流れも、ふれあいセンターの御配慮で実現しているところです。こうしたことを仕組みとして整えていくことで、持続可能なものになると感じています。

（事務局）熊毛上宇部中学校学校運営協議会委員

上宇部校区では、地域のものがどんどん中学校に入ってきておりますので、色々な情報交換をしながら、自画自賛ですが、人材、マンパワーを提供してきたと思っております。これからも、どんどん学校に入っていくって、様々なことに参画させていただいて、ふれあいセンターと中学校の間が確かなものになっていくのだろうと感じております。

（委員）久保田市長

それでは改めまして、コミュニティ・スクールの取組ということで、コロナ禍の今だからこそできる交流、そして、今まで当たり前と思っていたことにとらわれず、原点に立ち返ってみようということ、ふれあいセンターというとても大事な地域の拠点をもっと学校と連携させていきたいというお話がございまして、今日のこの具体的な事例である上宇部中学校の取組、市内最大規模の中学校でもありますので、本当に皆さんが注目しております。これからもますます校長と上宇部中学校運営協議会の委員の皆様が大いに伸び伸びと活躍をしていただきたいと思っております。

それでは、3点目の「心に不安や悩みを抱える児童生徒への対応」について、事務局の説明をお願いいたします。

（事務局）藤田教育支援課長

「心に不安や悩みを抱える児童生徒への対応」について説明します。新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う臨時休校の後、学校が再開しましたが、新しい生活様式や授業スタイルの中で、心に不安や悩みを抱える児童生徒の増加が懸念されてきました。現在の学校の状況と対応について、御説明させていただこうと思います。コロナ禍においては、気持ちがいらいらしたり、不安定になったりすることによって、他人に対する暴力や暴言や不登校といった形になって現れてくるのではないかと言われていました。1学期の市内小中学校の生徒指導上の諸課題に関する調査結果を三つお示しします。まず、暴力行為についてですが、大きな経年変化は見られません。次に、いじめの認知件数についてですが、全体の件数が減少しているのは、1学期の授業日数が減少したことが関係しているのではないかと考えております。子どもたちが困っていないか、何か悩みがないかということにつきましては、日頃から教職員が確認をしたり、アンケート調査等で、小さな変化を見逃さないようにしており、気になる児童生徒についてはスクールカウンセラーや教育相談担当によるカウンセリングを行っています。また、周囲にSOSを出すために、いろんな手段があるということも子どもたちに伝えていきます。最後に、不登校の児童生徒についてですが、全体では、少しずつ増加はしているところです。ただ、これについては、コロナ禍の影響によるものであるかについては、今後詳しく検証していく必要があると考えておりますが、新たな不登校に繋がらないように、様々な機関と連携、協力して、一人一人の内

面をとらえて、関わりを深める支援を引き続き行っていきたいと考えております。特に今年につきましては、コロナに対する不安や恐れから、感染者に対して差別や偏見、いじめ等も懸念されますので、学校では正しい知識と理解が深まるように取り組んでいます。これは、先日メディアでも取り上げられましたので、御存知の方も多いかと思いますが、学校で、日本赤十字社が作成した資料等を活用しまして、授業において人権について学ぶとともに、不安や恐れに振り回されない力、気づく、聞く、そして自分を支える力をつけていくことの必要性を子どもたちに伝えているところです。また、啓発ポスターの作成や配布もしています。ここで、スクールカウンセラーの小川先生から、学校での相談の様子や対応についてお話をさせていただきたいと思っております。

（事務局）小川スクールソーシャルワーカー

市内で発生した、新型コロナウイルス感染後の学校での対応についてお話させていただきます。まず、感染報道の際に市長さんも誹謗中傷を防ぐよう呼び掛けていらっしゃいましたが、保護者の間で情報がやりとりされて、他の学校の保護者にも情報が伝わっている状況でした。学校には、保護者から、個人を特定するような問い合わせの電話があったと聞いています。学校としては、個人情報はお答えできないという対応をしているわけですが、実際には、もうクラスも特定されている状況です。それで、学校の方ですけども、3日間休校の後、感染した子どものいたクラスを除き、登校が再開になりますけれども、まず、校長先生が朝一番に、全校放送を通じて、配慮ある行動をとるようにというお話をされました。その後、各クラス担任の方から再開にあたってのお話をされました。陽性の子どもがいたクラスは10日間の学級閉鎖になりますけれども、その間に担任から、休校中の子どもたちに、オンラインで2時間程度の授業をされていました。そこに感染した子どもも入って行って、他の子どもたちも自然に受け止め、オンラインで顔合わせができたことが良かったと思います。スクールカウンセラーとして、私は、担任と学級閉鎖明け後のクラスの対応について検討しました。登校再開の1時間目に、担任と私で、参考になる動画を見ながら、話し合っ、思いやりを持った対応について確認してもらいました。また、他の学年等で感染した方に対して差別的な言動があった場合は、すぐ担任に伝えるようにしていただきました。幸いなことに、嫌な思いをしたという訴えもなく、嫌がらせは確認されていません。感染した子どもも陰性になって登校再開するときも、学級閉鎖中や授業再開後もオンラインでクラスの子どものつながっていたので、スムーズにみんなの中に入るができました。

（委員）田村委員

感染者が発生した学校の子どものたちの間で、いじめ等もなかったと聞いていますが、怖いのは大人の方だと思います。大人が果たして、どこまで、情報を漏らしているのかという点について、大変心配していました。私が確認できた範囲では情報が洩れておらず、思ったほど、悪い状況になってない様子でした。そのあたりのことは考慮しておられるなど感じた次第です。今ほとんどの方がマスクをしている状態で、その表情が見えていないというところが、子どもたちの成長に関して懸念があり、議論をしているところです。もしかすると、入学した一年生では、友達の顔をあまり見たことがないとか、先生の素顔を

らないということも、そんなことはないとは思いますが、そのあたりが少し心配になっています。表情から読み取るものというのが大変大事なものだと思います。そうしたものは、経験していかなければいけないところだと思いますので、例えば、授業の際は、感染予防効果に疑問はありますが、先生は透明なマスクを使用する等、表情を伴ってコミュニケーションをとるといった工夫も必要なのではないかと思います。表情が分からないので、先生方もその小さな変化を見逃してしまいますというところにも繋がっていく可能性もありますので、より細心なケアをする必要があると思います。ICTの活用について、STOP i tも導入されていますので、こんな相談ツールもあるということ、子どもたちにもう1回よく説明をしておくことが必要なのではないかと思います。

(委員) 山野委員

小川先生も、本当に思いやりを持った対応をするということで、先生方を支えてくださったと思います。先生方も、感染者が家族や子どもたちから出た場合に、とても心強かったのではないかと感じました。今回、コロナ禍だからこそ学べるということがやっぱりあると思います。実際に、学校の中の子どもたちや先生が感染した場合や、他の学校の場合でも、先ほど上宇部中学校で人権教育をされていると説明されましたが、コロナ差別をなくすために、子どもたちに、みんなが一つになって、負のスパイラルを断ち切ることが大事だということを、コロナ禍だからこそ学べるということをすべての学校において、授業をされると良いと思いますが、多くの学校で、人権教育をされているのでしょうか。

(事務局) 藤田教育支援課長

人権教育についてですが、これはすべての学校において、実施されていると聞いております。

(委員) 野口教育長

先ほど紹介がありましたように、上宇部中学校、全ての学級で、同じ資料を活用して行われたということでした。これは素晴らしいことだと私は思います。教職員が共通理解するとともに、全ての子どもたちがコロナに対する高い意識を持つことができたのではないかと私は思っているのですが、その辺り紹介してもらえますでしょうか。

(事務局) 藤井上宇部中学校長

コロナ感染拡大の時に、的確なメッセージを出していただけたということで、私たちは大変心強く、そうした思いは、子どもたちにも共有していかなければならないということがきっかけとなりました。市として、コロナ差別に取り組んでいくという姿勢をしっかりと示していただいたというのがきっかけだったと思います。子どもたちもそうなのですが、教職員が正しく理解することも必要ですし、また、子どもたちの後ろにいらっしゃる保護者の皆様にも届いたら良いと思ひまして、コロナウイルス感染症そのものだけでなく、不安であるとか、差別というところをみんなで考えていきたいということで企画しました。今色々な学校と情報交換をしていますが、多くの学校で日本赤十字社の資料を使って実施していこうという動きが広がっているように感じています。

(重村委員)

今、コロナ禍の状況において、子どもたちが、いじめとか暴力だけではなく、もう少し

大きな漠然とした不安を持っているような気がしています。特に本学の大学生においても、将来に対する不安や、そういった不安に押しつぶされそうになって、すでにうつ症状になっている人も少しずつ出てきているような気がするのですが、実際に小学校等をスクールカウンセリングで回られる中で、今回のコロナに特化した不安のようなものが何かあれば教えていただければと思います。

(事務局) 小川スクールソーシャルワーカー

私が今、学校を回っている中で、コロナ禍での不安に関して、特にお聞きしていません。ただ、どこかにそうした不安を持つ方がいて、それを拾えていない可能性はあると思います。現状では、それほど広がっていないということもあるかもしれませんが、特に不安がということは出てきていないと思います。むしろ保護者の方が大変なのではないかと感じています。

(委員) 川崎委員

私も学校再開後の子どもたちの様子が一番気がかりでした。濃厚接触者となった子どもたちがいる学校では、校長先生が対応に追われている姿を見ました。本当に急なことで、何も前触れもなく起って、皆さんがとてもあわただしく動いていらっしゃいましたが、そのような状況で、保護者から私の方に問い合わせの電話をいただきました。最初のテーマではありませんが、ネットリテラシーについて、子どもたちだけではなく大人ももう一度学ぶ機会が必要なのではないかと思いました。学校に関して1学期の最初から学校が休校でクラスづくりができないまま、5月末から始まって、夏休みも少なくリフレッシュができないまま2学期が始まり、暑さや運動会の練習で子どもたちがとても疲れている様子を見させていただきました。今、涼しくなって、遊びも元気いっぱいに遊べるようになりましたが、心に不安を抱えていたり、疲れたままの子どもたちに息抜きができる場所を、私達が提供してあげなければいけないところなのかなと思っています。

(委員) 野口委員

コロナに関する子どもたちの心の不安は、そこまでではないと聞いて少し安心しましたが、例えば、色々な行事が中止になったり、部活ができない、大会が中止になる、様々な学校での活動が制限される状況の中で、大きなストレスを感じている子どもたちは多いのではないかという点について、校長会や教頭会でも、お話を少し聞かせていただいたのですが、小川先生の方で、そういう子どもたちに対してどのような関わりが必要か、何かアドバイスがあればお願いします。

(事務局) 小川スクールソーシャルワーカー

先ほどからお話があるように、withコロナと言われているわけですが、今までとは違う関わりといいますか、子どもたちが普通に遊んでいるときもどこか不自然な関わり方がまだ行われているのではないかと感じています。先ほど顔が見えないという話もありましたが、給食の時に話ができないといった普通だったらもっと子どもらしく騒ぐことができるのに、現在の騒ぐことができない状況では、我慢して頑張っているのではないかと思います。どこかで気持ちが和むような子どもらしく遊べる場を大人が用意することが必要だと思います。小学校では、マスクしながらでもできるような遊び等を工夫して実施する

と良いと思います。中学生の場合は、コロナ禍でどう動くべきか自覚していくことが必要なのではないのでしょうか。そういう場で、自分がずっと抱えているものを誰かと共有する時間が持てると良いのではないかと思います。

(委員) 久保田市長

ありがとうございます。それではまとめさせていただきたいと思います。令和になって2020年3月、4月、5月、6月、7月、8月、9月、10月と本当に、まさかというコロナウイルスとの戦いをしているわけでございます。その中で子どもたちの不安、また色々な差別というものも目の当たりにしました。特に最初の感染者の時は、宇部市の人権教育を根本から再考する必要があると思いました。そのぐらい、私どものこのコロナウイルスに対する皆さんの不安からの差別というものを目の当たりにしたわけですが、小川先生におっしゃっていただいたように、子どもが伸び伸びと遊べる場づくりをもっと大人が進めていくということと、思いやりを持った対応をしていくということが基本ですが、それにはやはり、もう1回、人権教育ということ、今、すべての学校で実施していますが、もっときめ細かく、人権教育は様々な実施方法があって良いと思いますので、それぞれの地域で、コミュニティ・スクールの中で、楽しく学ぶ人権教育、人権学習もあるのではないかと思います。そして、マスクによって表情がわかりにくいということで、マスクはつけないといけないのですが、マイナスの部分を補えるように工夫していけたらと思います。それでは、「コロナ禍における学校教育」については、当分の間付き合っていかなければなりませんので、この半年あまりで試行錯誤して培ったことについて、三つのテーマで、議論させていただきました。今日が一つのゴールというわけではなく、この経験と、そして将来に向かってみんなで知恵を出していけたらと思っています。本当に今日貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございます。それでは、令和2年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。

本当に皆さんありがとうございました。

(事務局) 上村教育部長

それでは、以上で令和2年度第1回宇部市総合教育会議を終了いたします。